

小学校高学年の部

特選 自由図書部門

題名 過去と未来をつなぐ今

揖斐川町立清水小学校五年

宮島 百花

青い空、青い海、サンサンとかがやく太陽、白い砂浜。気持ちの良い風が赤い花をゆらし、どこからか民ようが聞こえてくる。

これは、私のイメージする沖縄。そんな私のイメージ通りの沖縄の絵が描かれた表紙の「月(るな)と珊瑚。」しかし、読み進めていくと、そんなイメージとはかけはなれた沖縄の人々の暮らしがそこにはあった。

「詩音は、沖縄の六月きらい。テレビも新聞も、戦争のことばかり。」私は主人公の珊瑚よりも、東京から転校してきた詩音に共感できた。私も、今沖縄に転校したら、同じことを思っただろう。沖縄は六月になると六月二十三日の沖縄いれいの日まで平和月間として、小学校でも戦争の体験談や映像を見聞きし、平和を願う「月桃(げつとう)」を歌うのだそう。いれいの日は沖縄県は休日となり、沖縄戦でのぎせい者の追とうと平和を願う日だ。何だか、私の知らない国の話のように感じてしまうほどだ。

今年の夏で、終戦から七十八年。沖縄戦では、一般の沖縄県民も十万人がぎせいになり、四人に一人が命を落としたのだそう。昔の話だと私は思うけれど、沖縄の人々にとっては、戦争はとても身近にあるようだった。近くにアメリカ軍の基地があり、授業中も学校の上を戦闘機が大きな音を立てて飛んでいく。身近な人が反戦活動や基地移設反対の座り込みをして警察に連行されるし、今もあちこちに不発弾があり、工事をしていく。どれも、私たちには想像もできない。そもそも、私は、これまで生きてきて戦争について考えたことなど一度もない。夏になると、

戦争の番組が増えるけれど、何だかこわくてチャンネルを変えてきた。けれど、詩音に言ったクラスメイトの亮の言葉に、私は反省した。きつと詩音もそうだったに違いない。

「俺、沖縄県民だけど、六月がいやだった。戦争がきのうのことみたいで、忘れたいのに忘れられないから。でも、忘れちゃいけないんだって気づいたんだ。だって俺のじいちゃんばあちゃん親せきもたくさん死んだから。」

多くのぎせい者は、誰かの大切な人だったのだ。ただ、沖縄に生まれ、生活していた人達が、ある日突然戦争に巻き込まれ、家を焼かれ、怖い思いをし、命をうばわれたのだ。今もし自分の身に同じことが起きたらと思うとぞつとする。戦争をしてはいけないのは、当たり前なこと、誰もが思っていることだ。だけど、今も世界のあちこちで戦争は起きている。これからは生きていく私たちにとって、過去の戦争を知ることが必要なかもしれない。そして、過去の悲しい出来事を知った上で、戦争を繰り返さないこと、命をつないでいくことが大切なのではないか。私は、沖縄に行つたことがない。いつか、沖縄の現実を自分の目で見て、感じたことを誰かに伝えたいと思う。



上条 さなえ 作
『月と珊瑚』 講談社

講評

戦争はよくないものと当たり前に感じていた百花さんが、読書を通して、立ち止まって戦争と向き合うことができましたね。自身の戦争に対する気持ちを正直につづってあり、その正直さが読む人の共感を生み、心に届く素敵な感想文になりました。

小学校高学年の部

特選 自由図書部門

題名 毎日を楽しくするために

揖斐川町立北方小学校六年

河瀬 芽依

「毎日がつまらない。」

平日は学校、放課後や休日は習い事。たまにあるオフの日も家族は忙しく、お出かけもできない。ゲーム、インターネットくらいしか楽しみがない。そんな日常を私はこんな風に思っていました。毎日を楽しくしたいとは日ごろから考えてはいましたが、その方法は私には分かりませんでした。

この本の筆者の佐藤さんはフォトジャーナリストで、世界中を訪れては現地の方の写真をとり、話を聞き、それを人々に伝えていきます。佐藤さんはこの職業を通して世界の人々と出会い、数多くの「宝物」を見つけてきました。佐藤さんは色々なことに興味をもとうとし多くの事に挑戦、行動してきました。私もちよつとしたことにも興味をもって前向きに行動してみれば、このつまらない生活から抜け出せるのではないかと考えました。今までの私は、考えてみればとてもマイナス思考でした。お母さんに、

「買い物に行くけどついてく？」
と聞かれても、

「ついて行っても何もなさそうやで行かない。」

一緒に行けば新たな発見もあるかもしれないのにそうやってマイナスに考えてばかりでした。これからは色々なことに関心をもって、まずはいつもと少しちがうことをしてみることから始めようと思いました。

佐藤さんはザンビアの小さな村で、学校や病院のお手伝いをする活動

を行っていたことがありました。ザンビアはとても貧しい国で、医療も発達しておらず、命を落としてしまう子どもも大勢いました。料理をしようと思っても、まず道具を手に入れるために多くの時間と労力が必要だそうです。それに比べて私はなんて便利な生活を送っているのだろうと実感しました。私が学校や習い事に通えているのも、家でゲームを出来るのも決して当たり前だとは思ってはいけなかったのだと思います。便利な生活を当たり前と感じてしまっているから、私の毎日の生活もつまらないものになってしまっているのだろうと感じました。「つまらないな」と思うときこそ、なぜ今、自分がしていることができているのかなど考え、ありがたみを知ること大切なのではないかと考えました。

これから多くのことに積極的に取り組み、自分にとって「宝物」と思える物、出来事に会いたいと思いました。限りある時間を無駄にしないよう、前向きに物事をとらえ、新しい発見に出会うことで、つまらない毎日からわくわくに満ちあふれた、毎日が楽しいと思える日々にしていきたいです。

『10分後に自分の世界が広がる手紙 毎日がつまらない君へ』

株式会社東洋館出版社

佐藤 慧 作



講評

同じような毎日をつまらないと感じている芽依さん。佐藤さんの生き方や、ザンビアの現状からこれからの自分の生き方について深く考えることができました。これからのように生きていくのが自分の言葉で力強く表現されています。

努力の先にあるもの

養基小学校六年 久保田 丈尊

負けたことがくやしかったのか。レースに勝てなくなったことにあせりを感じたのか。ナルはライブル、チョヒの水着を自分のカバンに入れてしまう。なんてことをするんだとぼくはナルに怒りがわいてきた。

ナルが通う小学校の水泳部のみんなは、練習でもレースでも自分の記録をやぶり、結果が数字で表され、ランクをつけられる厳しい世界に生きている。好きで始めた水泳部なのにナルは何のために泳ぐのか、これでもいいのか悩む。

ぼくは、ナルと重なる事がたくさんある。

ぼくも、一年生から野球を続けている。試合で負けることは大きらいだ。でも、どんなにがんばっても負けることはある。

そして、ナルの周りには、ナルを支える家族、ナルのレースを自分のことのように応援する仲間。ぼくも同じだ。野球少年団のみんなだ。ぼくがヒットを打てば飛び上がって喜んでくれる。エラーをした時も肩をたたいて「ドンマイ」って優しくなぐさめてくれる。

ナルがチョヒの水着をぬすんだことを、コーチと仲間へ告白した時、みんなびっくりしたけれどナルの気持ちを理解しようとした。ぼくは、ナルの努力する姿をみんな知っているからだと思った。ナルがチョヒに負けて苦しい気持ちを分かるから。

さつきまで、わいていたナルへの怒りが少し小さくなった。

そして、その時にコーチがナルに言った言葉がいつまでもぼくの心の中にすこくすこく残っている。

「もしかしたら、どう負けるかが、どう勝つかよりも大切かもしれない。」

勝負は、とても重要だ。勝つということは本当に大変だし、幸せだ。

今までの努力の結果が実ったという事だ。でも、ぼくは、負けたから努力していかなかったわけではない事を知っているし、そんな時は、負けてももちろんくやしけれど、こうかいはない。

毎日、自主練習をがんばって臨んだ試合だから。そして、次こそは必ず勝つんだというやる気が、また、フツフツとわいてくる。

だから、この負けは絶対にマイナスではない。

ナルはチョヒにもすっかり謝罪した。謝ることはとても勇気のいることだと思う。でもナルが前へ進むためには絶対にしなければいけない事だったのだろう。もう、ぼくの中にナルに対して怒りの気持ちはなかった。

大きい小さいか、難しいか簡単か、人はきつと色々な場所や場面で何かに挑戦している。その何かに挑む時の過程が大切なのだ。

すべて告白したあとの大会で、ナルは精一杯泳いだ。最終的に二位でチョヒにまた負けてしまう。でも、コーチが言った「どう負けるか」が大事な意味のある試合になったのだと思う。ナルが水泳で得たものと同じようにぼくも納得いく勝利を手に入れたい。

ウン・ソホル 作 すんみ 訳

『5番レーン』

鈴木出版株式会社



講評

最初の一文目から、ナルに対する怒りの気持ちが伝わります。しかし、ナルの心情に寄り添いながら考えを広げ、深めていく中で、丈尊さんがナルを受け入れていくという心情変化が巧妙に描かれています。自身の生活経験を重ねながらの今後への決意に、丈尊さんの力強さを感じました。